

絵画制作と朗読の実践研究 ～文化マンス朗読会活動報告～

A study on the practice of painting and reading

- “Bunka-Month” activity report -

陣内 敦

I はじめに

子どもの時期に感性を磨き情操を豊かにすることは、かけがえのない育ちとなる。ここで重要な役割を果たすのが児童文化財であり、絵本や紙芝居、童謡などが挙げられる。これらは人が最初に享受する大切な文化である。子どもに初めて触れた児童文化財に対する興味・発見・喜び・感動は、大人が受けるものとは比較にならないほど、人格形成や意思の方向を形づくり、また夢や希望の種子となるものである。児童文化財によって、子どもの感性や情操の相当部分が形成されていくといっても過言ではない。大人はこのことを十分に認識しているからこそ、子ども達に素晴らしい児童文化財に触れてほしいと願っている。昨今、母親や父親の絵本の読み聞かせの大切さが語られるようになった。これによって各地で読み語りのグループが結成され、活動が活発化しているところである。

筆者が担任する専攻科保育専攻科の教育課程では、「児童文化研究」の科目を開講している。担当講師は、絵本作家でもあり佐世保市を中心に活動を行なっている読み語りグループ「おはなしマルシェ」のリーダー・新井悦子氏^(注1)である。氏の指導により、専攻科の学生達は佐世保市の文化振興事業「文化マンス」の中で、絵本の読み語り、影絵劇の実演、絵本制作のワークショップなど子どもがお話に触れる様々な活動に取り組んでいる。ここに参加している子ども達の表情は皆輝き、この活動がお話しを媒体としながら文化を育み共感し合う場となっていることが分かる。このような文化交流の意義と可能性に対して、筆者は強い関心を持った。こうした経緯から、平成28年と平成29年、「文化マンス」において自作の絵画の展示とこれを前にした朗読会を計画・開催することになった。

II 制作内容

筆者は、活動の第一段階として絵画作品の制作をおこなった。まずテーマとなる文学作品の選択については、筆者自身の育ちの中で大きな影響を与えたであろう印象的な物語から題材を得ることにした。

1 太宰治の短編小説『走れメロス』を題材にした絵画作品の制作



(部分)

題名；走れメロス

制作年月；2015年9月

作品の大きさ；縦90cm × 横480cm

描画材料等；インク、顔料、膠、アクリル、キャン

バス

制作意図：話の展開と主人公メロスが走る方向を右から左に統一して、視聴者の目がそれに合わせて動いていくような構成にした。また、“塗り残し”を利用し時間の移行を表した。細かな場面の描写は、例えば披露宴の様子を葡萄酒の壺に例えるなど象徴化をおこなった。

2 芥川龍之介の短編小説『蜘蛛の糸』を題材にした絵画作品の制作



(部分)

題名：蜘蛛の糸

制作年月：2016年3月

作品の大きさ：縦480cm × 横45cm

描画材料等：インク、顔料、膠、アクリル、キャンバス

制作意図：極楽は明るい色彩で最上部に、地獄は暗い色彩で最下部に描き、視聴者がここを目で行き来するように構成した。また、絵の具の“にじみ”を利用し、空間のゆがみを表現した。主人公のカンダタの姿形に極端なデフォルメをほどこし、人間の苦悩や罪深さを表した。

3 『不思議なオブジェ』の制作



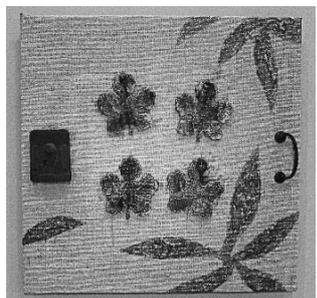
作品①



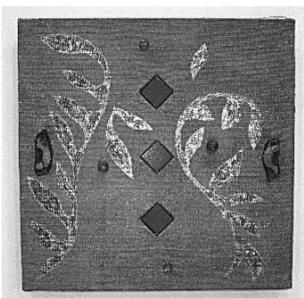
作品②



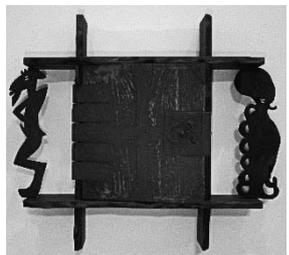
作品③



作品④



作品⑤



作品⑥



作品⑦



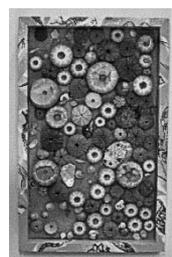
作品⑧



作品⑨



作品⑩



作品⑪



作品⑫



作品⑬



作品⑭



作品⑮



作品⑯



作品⑰

『不思議なオブジェ』の題名

①	暗い部屋の片隅に耳長山羊は住んでいました
②	黒山羊の引出しに入れた願い事は叶うでしょう
③	裏も表もない黒山羊には 右も左も分かりません
④	深い森の扉を開けてごらんなさい
⑤	深い海の扉を開けてごらんなさい
⑥	深い森と深い海を繋ぐ扉を覗いてごらんなさい
⑦	小さな騎士は白夜の荒れ野にいました
⑧	魔法薬を調合するには人生のコツがいるらしいのです
⑨	サー・ケトルはまだまだ負けるものかと湯気をあげました
⑩	小さな牧神は葉っぱの裏にいました
⑪	私たちに海中の青く光る精霊が見えました
⑫	魚人の男は美しい人魚の肖像を持っていました
⑬	クヌギの妖精 一郎
⑭	私たちはどこから来たのか 私たちはどこへ行くのか
⑮	私たちを並べて遊ぶあなたは誰なのですか
⑯	海に流された女 博愛という罪でした
⑰	海を漂う男 義憤という罪でした

制作年月；2016年3月～9月

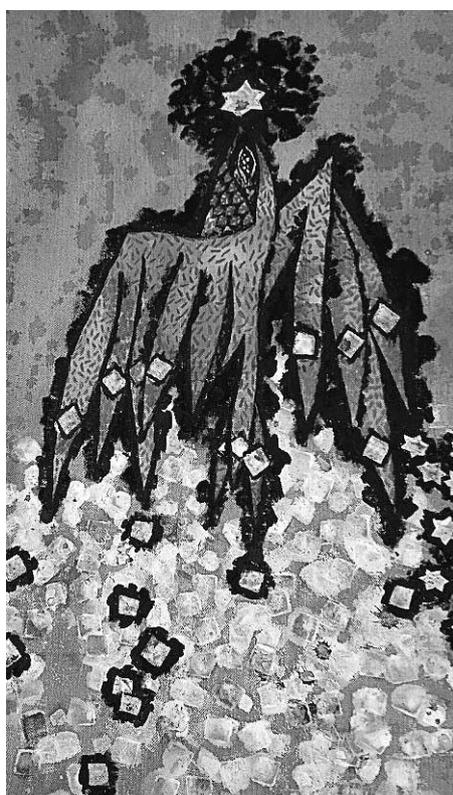
作品の大きさ；高さ25cm～136cm

造形材料等；古木、古布、升、麻布、古鍵、銅版、ニス、銅版、古民具、ケトル、鳥の羽、押し葉、ダンボール、薬瓶、ウニ殻、ビーズ、流木、フェルト、毛糸、ニス 等

制作意図；作品のテーマは、筆者がこれまで手掛けてきた英国バラッド挿絵制作の余韻から、そこに描き出されていた人物や妖精たちが元の物語から放たれ、自由に新たな物語を展開していくというストーリー構成を持っている。上に示すそれぞれの題名は、新たな物語の一文を記している。物語のあらすじに定まったものがあるわけではなく、見る人の文学的想像力にゆだねられている。全体的に中世イングランド風のイメージを用いている。

4 宮沢賢治の短編小説『よだかの星』を題材にした絵画作品

材料：帆布に着色【縦120cm×横400cm】



(部分)

題名：よだかの星

制作年月：2017年8月

作品の大きさ：縦400cm×横120cm

描画材料等：インク、顔料、膠、アクリル、帆布

制作意図：よだかは他の鳥たちから疎まれ、自分の生きる価値を見失なりそうになりながら星空を目指して飛んでいく。視聴者の視線が物語の展開と共に画面の下から上へ移動していくように構成している。主人公であるよだかの姿は、その特徴である地味な羽色の上に最後に光に充たされる白い斑点部分を強調した。さらに、哀憐に満ちた瞳を描いた。

5 芥川龍之介の短編小説『杜子春』を題材にした“光る紙芝居”の制作



(舞台)



(一場面)

Ⅲ 朗読会活動内容

1 「長い絵のお話」太宰治の短編小説『走れメロス』を題材にした絵画作品の展示と朗読



展示場所：アルカス佐世保 2階大ホール入り口

朗読日時・朗読者：

2016年10月29日(土) 16:00～16:25・陣内

10月30日(日) 16:00～16:25

・川崎氏(おはなしマルシェ)

朗読所要時間：25分

視聴者：のべ約70名

朗読文；走れメロス 太宰治

(引用；「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975)

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。

(中略)

「万歳、王様万歳。」

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、まっばだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

2 「長い絵のお話」芥川龍之介の短編小説『蜘蛛の糸』を題材にした絵画作品の展示と朗読



展示場所；アルカス佐世保 2階大ホール入り口

朗読日時・朗読者；

2016年10月29日(土) 11:30～11:55

・一ノ瀬氏(おはなしマルシェ)

10月30日(日) 12:00～12:25

・川崎氏(おはなしマルシェ)

朗読所要時間；25分

視聴者；のべ約70名

朗読文；蜘蛛の糸 芥川龍之介

(引用；「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
1968)

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

(中略)

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。

3 「不思議なオブジェ」の展示

展示場所；アルカス佐世保 2階茶室

展示日時・朗読者；2016年10月29日(土) 10:00
～10月30日(日)～17:00

4 「長い絵のお話」宮沢賢治の短編小説『よだかの星』を題材にした絵画作品の展示と朗読



展示場所：アルカス佐世保 2階大ホール入り口
朗読日時・朗読者：

2017年11月4日（土）11：00～11：20・陣内
11月5日（日）11：00～11：20
・川崎氏（おはなしマルシェ）

朗読所要時間：20分

視聴者：のべ約80名

朗読文：よだかの星 宮沢賢治

（引用：「新修宮沢賢治全集 第八巻」筑摩書房1979）

よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。（中略）

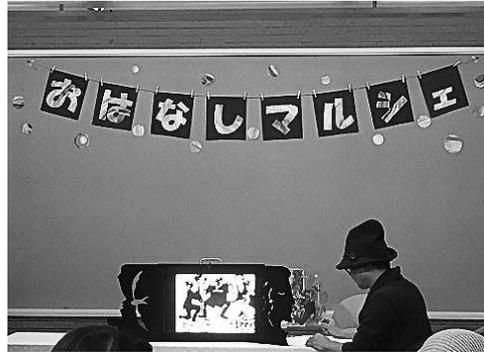
それからしばらくたってよだかははっきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまで

もいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています。

5 「光る紙芝居」芥川龍之介の短編小説『杜子春』を題材にした“光る紙芝居”作品の実演と朗読



実演場所：アルカス佐世保 1階交流スクエア

実演者：陣内

朗読日時・朗読者：

2017年11月4日（土）14：30～14：55
11月5日（日）14：30～14：55
・川崎氏（おはなしマルシェ）

朗読所要時間：25分

視聴者：のべ約100名

朗読文：杜子春 芥川龍之介

（引用：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社1968）

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ほんやり空を仰いでゐる、一人の若者がいました。

若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、財産を費ひ尽して、憐な身分になつてゐるのです。

（中略）

鉄冠子がかう言つて歩き出す内に、杜子春の方を振り返ると、「おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。

IV 朗読会の展開

アルカス佐世保での朗読会に参加された視聴者の招待あるいは紹介によって、以下の朗読会を開催した。

1 近隣中学校での展示ならびに朗読会

■佐世保市立祇園中学校

- ① 2016年12月12日(月) 昼休み 於；図書室
「長い絵のお話」太宰治の短編小説『走れメロス』
の絵画作品の展示と朗読

朗読者；中学校図書部員 協力；司書 国語教諭

- ② 2017年12月21日(木) 昼休み 於；図書室
「光る紙芝居」芥川龍之介の短編小説『杜子春』
の紙芝居作品の実演と朗読

朗読者；中学校図書部員 協力；司書

■有田町立西有田中学校

- ③ 2017年12月12日(火) 朝の読み聞かせ時間
於；体育館

「光る紙芝居」芥川龍之介の短編小説『杜子春』
の紙芝居作品の実演と朗読

朗読者；陣内智子(本校読み聞かせボランティア)
協力；校長他

2 近隣の図書館での展示ならびに朗読会

■佐世保市立図書館

- ① 2016年11月2日(水)～11月6日(日)

「長い絵のお話」太宰治の短編小説『走れメロス』
と芥川龍之介の短編小説『蜘蛛の糸』の絵画作
品の展示と朗読会

2016年11月2日(水)～11月17日(木)

「不思議なオブジェ」の展示

協力；図書館長 司書職員

- ② 2017年11月14日(火)～12月28日(木)

「長い絵のお話」宮沢賢治の短編小説『よだか
の星』の絵画作品の展示

協力；図書館長 司書職員

V 活動の振り返りと展望

1 作品制作について

(1) 「長い絵のお話」の構図法

「長い絵のお話」の3点の制作『走れメロス』『蜘蛛の糸』『よだかの星』では、“物語”をテーマにして絵画制作を行ってきた。この制作の内容の中には、筆者が同時期に並行して制作してきた挿絵の制作^(注2)とはまた違った絵画の表現形式がある。この挿絵の表現形式が物語の特徴的な一場面を描くのに対して、「長い絵のお話」の画面には物語のすべてのストーリー展開を描く必要があった。これら3点の物語は、それぞれ独特な時間や空間を展開していく。まず『走れメロス』では、メロスは王の支配する街と故郷を行き帰りする。ここでは横構図を用い、

メロスが右から左へ走り、王の街はスタート地点の右端とゴール地点の左端に2か所置くことにした。視聴者の目は右から左へと動いていく。『蜘蛛の糸』では、上部の穏やかな極楽から蜘蛛の糸が下に降ろされ、下部の怖ろしい地獄の話へと続き、さらに蜘蛛の糸をたどってカンダタが上に登っていく。視聴者の目は上から下へ、また下から上へと動いていく。『よだかの星』では、森の陰で木の葉に紛れているヨダカがいたぶられ戸惑いながら次第に上空へ飛び上がっていく。視聴者の目は下から上へと動いていく。一般的な西洋画の構図法ではこの時間と空間の動きを捉えにくく、ここで参考にしたものは日本の絵巻物の構図法であった。それぞれの場面が繋がりを持ちながら動いていく構図法を模索していくことは、自身の新しい表現法を開拓することにつながったと感じる。

(2) 「光る紙芝居」の手法と形体感

「光る紙芝居」の手法は2006年に開発した手法^(注3)である。この時は小学校の教室を少し暗くして小学1年生の反応を見た。小さな画面でも強い印象を与え視聴者の目を引き付けることができる表現である。また、切り絵の手法に基づいて作業を行なっていった。光のコントラストを効果的に用いるために黒い和紙をベースに用い、色彩部分は紙の質感を出すために御花紙を用いた。中国の洛陽を舞台とする物語であるので、中国の絵画などを参考にしながら人物や動物の形体を創っていった。形体を操作していく素描力の修練となったと感じる。

2 朗読会の実施について

今回初めての朗読をおこなうにあたり、発声法や速度、間の取り方や感情の込め方などに気を配った。この中で、改めて言葉が持つ伝達力の大きさを意識することができた。また、朗読会に参加した方々とのお話を通したコミュニケーションは、これまでの絵画作品発表とは違った一体感や心のつながりを感じるものであった。

3 今後の活動の展望

来年度には、「音と絵のあるお話会」の実施を計画している。佐世保の昔話「相浦川のカップ」を題材にした大きな絵を制作し、朗読会から観客の子ども達を巻き込んだ音を楽しむ演劇活動への展開にしたいと考案している。音と絵をお話の中に盛り込むことによって、子ども達のイメージを広げ、感性

を育てることができればと考えている。

(参考・引用文献)

- 1 太宰治「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房 1975
- 2 芥川龍之介「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社 1968
- 3 宮沢賢治「新修宮沢賢治全集 第八巻」筑摩書房 1979
- 4 芥川龍之介「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社 1968

(注)

1 新井悦子略歴；佐世保市生まれ。筑波大学日本語日本文化学類卒。子ども向け教材の編集を経て、出産を機に佐世保へ帰る。絵本に『いたいのいたいのとんでゆけ』（鈴木出版）、『きょうはとくべつなひ』（教育画劇）、『だいすきのしるし』（岩崎書店）、紙芝居『だいくとねこ』（教育画劇）などがある。日本児童文芸家協会会員。

2 英国バラッド研究者であるチャイルド（Francis James Child 1825～96年）が著書『英蘇バラッド集』（The English and Scottish Popular Ballads）を基に、日本バラッド協会が「全訳チャイルド・バラッド全3巻」を編集している。「バラッド」とは中世以来ヨーロッパ各地で吟遊詩人や民衆によってつくられ、口承伝承として世代から世代へとうたい継がれてきた物語歌をさす。筆者が日本バラッド協会から依頼を受け、この「全訳チャイルド・バラッド全3巻」に収められている306篇の挿絵319点を完成させた。これらの挿絵作品とその絵画論は、2015年の本学研究紀要に「絵画私論5」として、2016年の紀要に「絵画私論6」として、2018年の紀要に「絵画私論7」掲載している。

3 「光る紙芝居」は、2006年の保育学科ゼミ活動の中で開発した手法であり、2007年の本学研究紀要、「地域の歴史や文化の伝承と保育者の役割」～光る紙芝居の制作・上演の指導を通して～において解説している。

長崎短期大学研究倫理委員会承認【第1810号】